

達成行動を阻害する要因に関する考察(2)

The Study about Elements that Interrupt Achievement Behavior(2)

樋口 康彦
HIGUCHI Yasuhiko

要約

本研究においては達成行動阻害要因に関する基礎的な知見を得るため、その次元(因子)の確認、および各次元が4場面(課題の性質2条件[男性的,女性的]×競争相手の性別2条件[男性,女性])において達成行動に与える影響の確認、を行った。被験者としては中学生234人(男子144人,女子90人)を用いた。投影法を用いた調査の結果、以下のことが明らかになった。

- 1.達成行動阻害要因の因子として、「競争相手に対する気遣い」、「失敗によって受ける恥」、「他者からの嫌がらせ」、「怠惰さ」、「自信の欠如」、「性役割に基づく成功不安」、「動機づけの欠如」、「成功後の負担の増加」、「重要性の認知の欠如」の計9因子が確認された。
- 2.男女ともに自らの性役割にそぐわない課題に挑戦しようとするとき、競争相手の性別とは関係なく、他者からの嫌がらせや性役割に基づく不安によって、達成行動を阻害されていた。しかし、その影響の大きさは他の阻害要因に比べて顕著であるとは言えなかった。

キーワード：達成行動, 達成行動阻害要因, 成功回避

目的

達成動機の高いことで、より多く達成行動が導かれるであろうか。何らかの課題を成功させること(目標)に対して強く動機づけられていることで、それを実現するための手段である達成行動がより多く取られる、という考えには一見矛盾がないように感じられる。しかし、例えば、Atkinson(1958)による失敗回避動機の研究は、その一見正しそうな考えに対し疑問を投げかけるものであった。Atkinson(1958)は様々な調査の結果、たとえ達成動機が高くても失敗回避動機がそれより強く働いたなら、結果として達成行動は弱められたり、取られなくなる、という新しい知見を示したのである。しかし、この知見を支持しない研究結果(Isaacson, 1964)も報告されており、失敗回避動機と達成行動のより詳細な関係の解明が望まれている。

また、Horner(1968, 1972)は達成動機、失敗回避動機に続く第3の動機として成功回避動機という概念を提示した。Horner(1968)は、「アンは1学期の期末試験の結果が、医学部で1番であったことを知る。」といった刺激文を被験者に与え、それに対する反応を分析した。そして、女子においては、成功することによる社会的拒絶を恐れる気持ち、女性性(女性らしさ)の喪失を恐れる気持ち、等によって達成行動を抑制したり、達成を回避する物語を作る傾向が高いということを見いだしたのである。その後、Horner(1968)を追試する形で様々な調査が行われたが、成功回避動機が男性にも存在するというを示唆する結果(Robbins & Robbins, 1973; Hoffman, 1974)や、他の様々な要因からの影響が存在するため達成回避動機と達成回避行動とは必ずし

も一貫した関係にはないということを示す結果(Spence, 1974)も示された。そこで、果たして成功回避動機は存在し、そのことによって達成行動が回避されるのかということに関しては、まだ確実な結論が得られていない(Hyland, 1989)。

上に示すように、達成行動阻害要因と達成行動との間に一貫した結果が得られないという事態を招いたひとつの原因としては、場面によって「取らなければならない達成行動の性質」や「成功のもたらす結果」が異なっているため、達成行動を阻害する要因も異なっているのではないかとということが挙げられる。例えば、学年で1番の成績を取るため勉強をするという達成行動においては怠惰さや性役割に基づく成功恐怖が阻害要因となるが、売り上げを伸ばすためセールス活動を行うという達成行動においては内気であることや同僚からの嫉妬を恐れる気持ちが阻害要因になっているといったことがあるかもしれない。

こうして考えてみると、Atkinson(1958)の失敗回避動機やHorner(1968)の成功回避動機も達成行動を阻害する多くの要因の中のひとつにしかすぎず、しかも、微妙な状況の違いによって極めて顕著に現れたり、ほとんど現れなかったりする、という可能性が否定できない。そこで、全ての達成回避行動の理由を失敗回避動機や成功回避動機だけに求めるのには無理があり、様々な場面ごとになぜ達成行動を取ることができないのかに関する理由を解明していこうとする試みが重要になってくると思われる。なぜならこのような試みを行っていくことにより、従来、ただ単に、「やる気がなく消極的である(達成行動を取らない)」として漠然ととらえられてきたものに対し厳密に迫ることができ、例えばアンダー・アチーバーやアパシーを訴える大学生などに対する指導の分野にも応用できるからである。

また、アンダー・アチーバーやアパシーを訴える大学生といったような達成行動に特別な問題がある人に限らず、一般に人がある目標を立て、その実現を目指して達成行動を行う場合、それはある意味で達成行動を妨げる様々な障害を取り除いていく過程であると言えるし、また観点を変えると、「売り上げの増加」や「試験に合格する」といった目標を達成するため日常こなさなければならない仕事や勉強も達成行動を妨げる要因からの影響をひとつひとつ克服していく過程であると言える。そういった点でも達成行動阻害要因と達成行動とのメカニズムを場面ごとに解明していくことは重要であると思われる。

以上のことを受け、本研究では、今後の応用研究に向け達成行動阻害要因に関する基礎的な知見を得ておくために、シナリオ・スタディを用いて、次の2点に関する探索的調査を行いたい。

1. 達成行動を阻害する要因の次元(因子)を確認する。
2. 性質の異なった場面をいくつか作成し、達成行動を阻害する各要因が達成行動に与える影響の大きさについてそれぞれ確認する。

方法

予備調査

今回の被験者に適用可能な達成行動阻害要因測定項目を作成するため、本調査に先立ち、1996年7月に大阪府下のA中学校の生徒、計57名(全員が2年生)に対し予備調査を行った。「あなたは、今までに、何か(テストのための勉強、スポーツや楽器がうまくなるための練習など)をしようという気になったが、けっきょくやらなかったというけいけんがなんどもあるだろうと思います。あなたはなぜやらなかったのでしょうか。思い出したことを、例にならって、かじょう書きで、できるだけたくさんお書きください。」という教示を与え、自由記述方式で回答を求めた。

得られた記述は、全てKJ法を用いて分類した後、質問項目の形式に改め、達成行動阻害要因測定項目作成の際のアイテムプールとした。

本調査

調査時期 1996年9月。

被験者および調査方法 大阪府下に所在するB中学校の生徒，計234人(うち男子144人，女子90人，平均年齢 = 12.6歳，SD = 0.57)を被験者に用いた(詳細についてはTable 1参照)。調査方法としては留置法を用い，質問紙をホームルームの時間に配布し自宅に持ち帰らせ，後日回収した。

Table 1
年齢別の人数分布

	男子	女子
年齢(歳)		
12	70	26
13	74	52
14	0	12

質問項目の構成

1. 達成行動場面 従来，達成回避行動の研究においては，何らかの達成場面を含んだ刺激文を被験者に与え，それに対する反応を分析するという投影法的な測定が主流になっており(宮本，1979)，本論においてもそれに倣うことにした。そして達成行動を取ることを期待されているにもかかわらず，それを躊躇しているという場面を作成し，なぜ躊躇していると思うのかについて推測させるという方法を用いることにした。さて，操作する状況の性質は無数に考えられるが，今回は，探索的に行う第1回目の調査であることから，従来の研究(宮本，1979)において問題にされることが多く，また達成行動に影響するということが確かめられてきている，課題の性質(男性的，女性的)と競争相手の性質(男子，女子)を用いることにし，この2条件を操作した4場面(2×2)をそれぞれ作成することにした。さてその場合，人が置かれる達成場面としては(a)課題が男性的で競争相手が男子の場合，(b)課題が男性的で競争相手が女子の場合，(c)課題が女性的で競争相手が女子の場合，(d)課題が女性的で競争相手が男子の場合，という4パターンが考えられる。

そこで，まず男子については，(a) - (d)の各場面を表す記述を以下のように作成した。(a) A中学は男子250人，女子245人の公立中学校です。その3年生の坂本和彦君は，クラスのみならず生徒会長のせんきょにりっこうほするように，すいせんされました。せんきょにはすでに3年生の山本三郎君がりっこうほしています。しかし，学校の人気者の和彦君なら，せんきょに勝って，生徒会長になれるかもしれません。それにもかかわらず，和彦君はりっこうほをするか，しないかで，現在まよっています。さて，なぜ和彦君は，まよっているのでしょうか？それぞれのこうもくが，どれくらい理由としてあてはまるか，あなたが思う番号に をつけてください。(b) B中学は男子215人，女子210人の公立中学校です。その3年生の柴田健二君は，クラスのみならず生徒会長のせんきょにりっこうほするように，すいせんされました。せんきょにはすでに3年生の野崎晴子さんがりっこうほしています。しかし，学校の人気者の健二君なら，せんきょに勝って，生徒会長になれるかもしれません。それにもかかわらず，健二君はりっこうほをするか，しないかで，現在まよっています。さて，なぜ健二君は，まよっているのでしょうか？それぞれのこうもくが，どれくらい理由としてあてはまるか，あなたが思う番号に をつけてください。(c) C中学は男子225人，女子220人の公立中学校です。その3年生の岡田良夫君は，学校の料理部の部員です。料理部は女子の数が多いい部です。良夫君は昔から料理が好きで，この部に入りました。さて，良夫君は，あるとき，部のメンバーから部長のせんきょにりっこうほするように，すいせんされました。せんきょにはすでに3年生の井上順子さんがりっこうほしています。しかし，部の中では人気者の良夫君なら，せんきょに勝って，料理部の部長になれるかもしれません。それにもかかわらず，良夫君はりっこうほをするか，しないかで，現在まよっています。さて，なぜ良夫君は，まよっているのでしょうか？それぞれのこうもくが，どれくらい理由としてあてはまるか，あなたが思う番号に を

つけてください。(d)D中学は男子280人、女子270人の公立中学校です。その3年生の鈴木太郎君は、学校の料理部の部員です。料理部は女子の数が多いい部です。太郎君は昔から料理が好きで、この部に入りました。さて、太郎君は、あるとき、部のメンバーから部長のせんきょにりっこうほするように、すいせんされました。選挙にはすでに3年生の加藤清志君がりっこうほしています。しかし、部の中では人気者の太郎君なら、せんきょに勝って、料理部の部長になれるかもしれません。それにもかかわらず、太郎君はりっこうほをするか、しないかで、現在まよっています。さて、なぜ太郎君は、まよっているのでしょうか？それぞれのこうもくが、どれくらい理由としてあてはまるか、あなたが思う番号に をつけてください。

次に、女子について、以下の(a)-(d)の4場面を作成した。(a)A中学は男子270人、女子265人の公立中学校です。その3年生の松下久美子さんは、クラスのみんなから生徒会長のせんきょにりっこうほするように、すいせんされました。せんきょにはすでに3年生の上田一郎君がりっこうほしています。しかし、学校の人気者の久美子さんなら、せんきょに勝って、生徒会長になれるかもしれません。それにもかかわらず、久美子さんはりっこうほをするか、しないかで、現在まよっています。さて、なぜ久美子さんは、まよっているのでしょうか？それぞれのこうもくが、どれくらい理由としてあてはまるか、あなたが思う番号に をつけてください。(b)B中学は男子280人、女子270人の公立中学校です。その3年生の小林由美子さんは、クラスのみんなから生徒会長のせんきょにりっこうほするように、すいせんされました。せんきょにはすでに3年生の谷口典子さんがりっこうほしています。しかし、学校の人気者の由美子さんなら、せんきょに勝って、生徒会長になれるかもしれません。それにもかかわらず、由美子さんはりっこうほをするか、しないかで、現在まよっています。さて、なぜ由美子さんは、まよっているのでしょうか？それぞれのこうもくが、どれくらい理由としてあてはまるか、あなたが思う番号に をつけてください。(c)C中学は男子210人、女子200人の公立中学校です。その3年生の佐藤知子さんは、学校の料理部の部員です。料理部は女子の数が多いい部です。知子さんは昔から料理が好きで、この部に入りました。さて、知子さんは、あるとき、部のメンバーから部長のせんきょにりっこうほするように、すいせんされました。せんきょにはすでに3年生の北島直子さんがりっこうほしています。しかし、部の中では人気者の知子さんなら、せんきょに勝って、料理部の部長になれるかもしれません。それにもかかわらず、知子さんはりっこうほをするか、しないかで、現在まよっています。さて、なぜ知子さんは、まよっているのでしょうか？それぞれのこうもくが、どれくらい理由としてあてはまるか、あなたが思う番号に をつけてください。(d)D中学は男子290人、女子280人の公立中学校です。その3年生の中村京子さんは、学校の料理部の部員です。料理部は女子の数が多いい部です。京子さんは昔から料理が好きで、この部に入りました。さて、京子さんは、あるとき、部のメンバーから部長のせんきょにりっこうほするように、すいせんされました。せんきょにはすでに3年生の高田康夫君がりっこうほしています。しかし、部の中では人気者の京子さんなら、せんきょに勝って、料理部の部長になれるかもしれません。それにもかかわらず、京子さんはりっこうほをするか、しないかで、現在まよっています。さて、なぜ京子さんは、まよっているのでしょうか？それぞれのこうもくが、どれくらい理由としてあてはまるか、あなたが思う番号に をつけてください。

なお、男女ともに場面の向きを変えた2種類の質問紙(A D B C版とC B D A版)を半分ずつ作成し、順序効果を相殺できるようにした。

2.達成行動阻害要因測定項目 予備調査の結果、中学生が抱いていると思われる達成行動阻害要因の次元として次の9つの側面が見いだされた。(a)突出することによる他者からの嫌がらせ：達成行動を取ることにより目立ってしまい、いわゆる「出る杭は打たれる」式に他者からの嫌がらせを受けることに関する認知が阻害要因となっている場合。(b)怠惰さ：怠惰であるというパーソナリティ特性が阻害要因となっている場合。(c)自信の欠如：仮に成功したとしても、その達成が過度の負担を生み、その負担は自分の能力の限界を超えているのではないかという認知が阻害要因となっている場合。(d)動機づけの欠如：課題を成功させることに

対し興味を持っていないことが阻害要因となっている場合。(e)性役割に基づく成功不安: Horner(1968)の一連の研究でも指摘されている, 性役割を逸脱してしまうことによって周囲から拒絶, 排斥されるのではないかと認知的に阻害要因となっている場合。(f)重要性の認知の欠如: 課題に興味がある, ないに関わらず, 他に取り組むべきもっと大切なことがあり, そちらを優先すべきであるという認知が達成行動を妨げている場合。(g)成功後の負担の増加: 余計な仕事を背負うことにより負担を増やしたくないと言う気持ちが阻害要因となっている場合。(h)失敗によって受ける恥: せっかく取った達成行動が失敗に終わってしまった時, 恥ずかしい思いをしなければならないという認知が達成行動を妨げている場合。(i)競争相手に対する気遣い: 自らの達成行動が成功した結果, 競争相手を傷つけてしまうのではないかと認知的に阻害要因となっている場合。

さて上記の(a) - (i)を表す項目を作成しなければならないが, その際, 特に留意したことは, 被験者はよく似た場面ごとに, 同じ項目に対し計4度答えなければならないということである。当然, 途中で疲労してくることが予想される。そのため作成の段階でできる限り項目を精選して, 数を少なくすることにした。具体的には, 項目数を各次元につき3つに抑えた。

そして, 計27項目に対し, とてもよくあてはまる(5点), すこしあてはまる(4点), どちらともいえない(3点), あまりあてはまらない(2点), まったくあてはまらない(1点)までの5件法で回答を求めた。なお, 被験者は4場面ごとに, 各項目に対する回答を求められるため, 計108項目(4場面×27項目)に回答することになる。

3. 達成行動測定項目 達成行動を阻害する各要因が, 具体的に達成行動を取る, 取らないの決定に対しどの程度影響を与えているのかについて検討するため, 登場人物が立候補したと思うか, 思わないかについて問う項目を作成した。具体的には, 「さて, けっきょく, - - 君(さん)はりっこうほしたと思いますか, それともしなかったと思いますか? あなたがそう思う番号に をつけて下さい。」, という質問を各場面ごとに行った。なお, 得られた回答は, 立候補しなかったを「1」, 立候補したを「0」とするダミー変数で表すことにした。

結果と考察

分析1 達成行動阻害要因測定項目の因子分析

中学生の達成行動阻害要因の次元を確認するため, 峰田(1969), 東村(1972), 樋口(1996a)の手続きにならない, 全ての概念(場面)を混みにして936行(場面数4×被験者数234)に対し因子分析を行った。なお, 共通性の推定は主軸法によった。スクリーテストおよび因子数を変えての分析結果の内容を参考に最適な因子数を探ったところ, とともに最適解を得たのは因子数を9にしたときであった。ちなみに第 因子までで全分散の75.8%が説明可能であり, 因子数を10にした場合は全分散の78.7%が説明可能であった。次に, 因子負荷行列をバリマックス法, 斜行プロマックス法によって回転させた。因子間の一部に, 中程度の相関が見られたため, 解釈にあたっては斜行プロマックス解を採用した。結果はTable 2 に示す通りである。項目選択の際は, 因子負荷量が.4以上で他の因子に対する負荷量が.3以下であることを基準とした。また項目内容のカッコ内には被験者が理解しやすいように, 各場面にそくした人物名や役職名が挿入されていた。以下, 因子の解釈を行う。

第 因子 項目「15.もし勝てば, 競争相手(- - 君[さん])に対して悪いから。」, 「21.もし勝てば, 競争相手(- - 君[さん])にいやな思いをさせてしまうから。」等が高い負荷を示している。これらの項目は, 当初, 競争相手に対する気遣いとして設定していた項目であり, いずれの項目からも競争に自分が勝つことによって相手を傷つけてしまうことへの配慮が見てとれる。そこで, 「競争相手に対する気遣い」の因子と命名する。

第 因子 項目「12.もし, せんきょに負けたら, はじをかくから。」, 「27.もし, せんきょに負けたら,



かっこ悪いから。」等が高い負荷を示している。この因子に高い負荷を示している項目は全て「失敗によって受ける恥」測定項目として設定していたものであり、達成行動が失敗に終わった後、自分が受ける恥に関する内容を表している。そこで「失敗によって受ける恥」の因子と命名する。

第 因子 項目「22.きどっていると思われて、ほかの人から、いやがらせをされると困るから。」、「05.めだってしまって、ほかの人から、いやがらせをされるかもしれないから。」等が高い負荷を示している。これらの項目は、当初、成功による他者からの嫌がらせとして設定していた項目であり、いずれの項目も達成行動を取ることによって周囲から受ける妬みや冷やかしを心配することに関する内容を表している。そこで、「他者からの嫌がらせ」の因子と命名する。

第 因子 項目「16.(- -君[さん]は)面倒くさがり屋だから。」、「23.(- -君[さん]は)面倒くさいことを、したがらない性格の人だから。」等が高い負荷を示している。この因子に高い負荷を示している項目は全て「怠惰さ」測定項目として設定していたものであり、本人の怠慢な性格に関する共通の概念が見てとれる。そこで第 因子は「怠惰さ」の因子と命名する。

第 因子 項目「20.その役目(- -)は、自分にはできそうにないと思っているから。」、「13.その役目(- -)をやっていくのは、自分には無理だと思っているから。」等が高い負荷を示している。この因子に高い負荷を示している項目は全て「自信の欠如」測定項目として設定していたものであり、達成の結果、自らが背負わなければならない責任への自信に関する内容を表している。そこで「自信の欠如」の因子と命名する。

第 因子 項目「04.男(女)なのに、そういう役目(- -)をすると、ほかの人から男(女)らしくないと思われるから。」、「10.そういう役目(- -)をするのは、男(女)らしくないことだから。」等が高い負荷を示している。これらの項目は、当初、「性役割に基づく成功不安」として設定していた項目であり、いずれの項目からも、達成行動が成功することにより、社会の期待する性役割から逸脱してしまうことへの不安を表す内容が見てとれる。そこで、「性役割に基づく成功不安」の因子と命名する。

第 因子 項目「24.そのこと(- -になること)に、みりょくを感じていないから。」、「17.そのこと(- -になること)に興味がないから。」等が高い負荷を示している。この因子に高い負荷を示している項目は全て「動機づけの欠如」測定項目として設定していたものであり、対象の課題に興味を持っていないことに関する内容を表している。そこで「動機づけの欠如」の因子と命名する。

第 因子 項目「11.もし勝てたとしても、責任が重くなり、心が休まらなくなるから。」、「02.もし勝てたとしても、責任が増えて自分の時間が少なくなるから。」等が高い負荷を示している。この因子に高い負荷を示している項目は全て「成功後の負担の増加」測定項目として設定していたものであり、達成行動が成功に終わった後、自分が引き受けなければならない負担を心配することに関する内容を表している。そこで、「成功後の負担の増加」の因子と命名する。

第 因子 項目「18.(- -になることは)自分の将来にとって、どうでもよいことだから。」、「25.(- -になることは)自分の将来にとって、重要なことではないから。」等が高い負荷を示している。この因子に高い負荷を示している項目は全て「重要性の認知の欠如」測定項目として設定していたものであり、達成行動の成功が本人にとってさほど重要ではないということに関する共通の概念が見てとれる。そこでこの因子は「重要性の認知の欠如」の因子と命名する。

因子分析の後、尺度の妥当性に関する検討を行った。具体的には、まず最初に、当初設定した構造と因子分析で得られた構造との関係を見てみた。その結果、これらふたつは一致しており、理論的に矛盾する結果は示されていないことを確認した。そして次に、項目をランダムに並び替えた後、9つの因子名とその概念を提示し、各項目がどの因子に属するか、について社会心理学専攻の5人の大学院生に判定を求めた。結果、5人の判定は因子分析の結果と100%一致した。そこで、妥当性は保たれているとした。

次に尺度の信頼性に関する検討を行った。まず、Table 2の右端には樋口(1995, 1996b)に倣い「当該項目の

尺度得点」と「その項目以外の尺度得点の総和」との相関係数の値を因子ごとに示した。求められた相関係数はどの因子においても、全て $p < .01$ 水準で有意であった。またTable 2の右下には係数も示したが、全てがほぼ満足すべき値となっている。以上の結果から尺度の信頼性も保たれているとした。

そして最後に、本分析の結果得られた男女全ての被験者の4場面における回答を混みにした因子分析の構造が、男子生徒、女子生徒のそれぞれの場面における因子の構造を正しく反映するものであるかどうかについて、つまり全部を混みにした構造と各場面ごとの因子の構造との共通性について、男女ごとに確認することにした。具体的には、斜行プロクラテス法を用いて、次の(a) - (c)の手続きにより因子間の一致性を求めた。(a)当該項目の所属する因子に1.0、それ以外の因子に0を入れたマトリックスを作成する。(b)前の(a)で作成したマトリックスをターゲットにして、各場面のデータ行列を男女ごとに斜行プロクラテス法により回転させる。(c)柴田・辻岡(1984)を参考に一致性係数を算出する。Table 3 - 4にその結果を示すが、概ね満足すべき高い一致性係数が得られたと言えるだろう。

Table 3
プロクラテス回転後の一致性係数(男性)

	第 場面 男性的課題 男性と競争	第 場面 男性的課題 女性と競争	第 場面 女性的課題 女性と競争	第 場面 女性的課題 男性と競争
第 因子 競争相手に対する気遣い	.918	.945	.946	.859
第 因子 失敗によって受ける恥	.947	.983	.973	.945
第 因子 他者からのいやがらせ	.931	.978	.929	.839
第 因子 怠惰さ	.851	.862	.971	.923
第 因子 自信の欠如	.885	.869	.796	.906
第 因子 性役割に基づく成功不安	.929	.958	.904	.899
第 因子 動機づけの欠如	.796	.653	.853	.858
第 因子 成功後の負担の増加	.870	.944	.813	.845
第 因子 重要性の認知の欠如	.669	.801	.599	.340

Table 4
プロクラテス回転後の一致性係数(女性)

	第 場面 男性的課題 男性と競争	第 場面 男性的課題 女性と競争	第 場面 女性的課題 女性と競争	第 場面 女性的課題 男性と競争
第 因子 競争相手に対する気遣い	.887	.958	.975	.973
第 因子 失敗によって受ける恥	.943	.887	.886	.858
第 因子 他者からのいやがらせ	.917	.794	.825	.857
第 因子 怠惰さ	.914	.925	.940	.910
第 因子 自信の欠如	.883	.940	.896	.772
第 因子 性役割に基づく成功不安	.940	.958	.969	.894
第 因子 動機づけの欠如	.904	.897	.777	.818
第 因子 成功後の負担の増加	.798	.779	.804	.907
第 因子 重要性の認知の欠如	.573	.652	.782	.667

分析2 達成行動阻害要因と達成行動との重回帰分析

達成行動阻害要因と達成行動との関係をとらえるために、古谷野(1988)に基づき、各達成行動阻害要因の得点を独立変数とし、達成行動を取るか取らないかについての得点(立候補しなかったを「1」、立候補したを「0」とするダミー変数)を従属変数とする重回帰分析を行った。Table 5 - 6 にその結果を示す。例えば、Table 5 の左上の-.101という値は課題の性質が男性的で、競争相手が男子である場面における男子生徒の達成行動阻害要因第 1 因子(競争相手に対する気遣い)の得点と、達成行動を取るか取らないかの得点との標準偏回帰係数である。

Table 5
達成行動阻害要因と達成行動の重回帰分析結果(男性)

	第 場面 男性的課題 男性と競争	第 場面 男性的課題 女性と競争	第 場面 女性的課題 女性と競争	第 場面 女性的課題 男性と競争
第 因子 競争相手に対する気遣い	-.101	-.070	.069	.020
第 因子 失敗によって受ける恥	-.088	-.100	-.074	.144
第 因子 他者からのいやがらせ	.133	.109	.321**	.241**
第 因子 怠惰さ	-.060	.094	.076	-.083
第 因子 自信の欠如	.181*	.166	.026	.072
第 因子 性役割に基づく成功不安	.008	.156	.257**	.244*
第 因子 動機づけの欠如	-.124	.050	.272*	-.020
第 因子 成功後の負担の増加	.257**	.348**	.203	-.058
第 因子 重要性の認知の欠如	-.045	.082	.187	.209*
決定係数(R ²)	.151**	.221**	.204**	.174**

註: p<.10, * p<.05, ** p<.01

Table 6
達成行動阻害要因と達成行動の重回帰分析結果(女性)

	第 場面 男性的課題 男性と競争	第 場面 男性的課題 女性と競争	第 場面 女性的課題 女性と競争	第 場面 女性的課題 男性と競争
第 因子 競争相手に対する気遣い	-.086	-.009	.030	.214
第 因子 失敗によって受ける恥	.018	.169	.129	.007
第 因子 他者からのいやがらせ	.289**	.280**	.138	.202
第 因子 怠惰さ	.145	.165	.303*	-.149
第 因子 自信の欠如	.308**	.313**	.121	.242
第 因子 性役割に基づく成功不安	.253*	.280**	.187	-.073
第 因子 動機づけの欠如	-.133	-.162	.391**	.287*
第 因子 成功後の負担の増加	.315**	.314**	.116	.097
第 因子 重要性の認知の欠如	.228*	.233*	-.069	.292*
決定係数(R ²)	.461**	.445**	.405**	.200*

註: p<.10, * p<.05, ** p<.01

まず、男子被験者の結果(Table 5)から見てみる。全ての場面において決定係数は有意であり、モデルは有効であった。まず、第 1 場面においては自信の欠如が5%水準で、成功後の負担の増加が1%水準で有意なプラスの標準偏回帰係数を示している。一方、第 2 場面においては成功後の負担の増加が1%水準で有意なプラスの標準偏回帰係数を示している。両場面とも、達成後果たさなければならぬ仕事に関することであり、やはり生徒会長の選挙に立候補するという達成行動を取るには、その当選後に生じる様々なプレッシャーが主な

阻害要因となっているようである。また競争相手が男子であるか、それとも女子であるかといった条件の違いはそれほど結果に影響していないように思われる。

第 場面においては他者からの嫌がらせが 1%水準で、性役割に基づく成功不安が 1%水準で、そして動機づけの欠如が 5%水準で有意なプラスの標準偏回帰係数を示している。第 場面においては他者からの嫌がらせが 1%水準で、性役割に基づく成功不安が 1%水準で、そして重要性の認知の欠如が 5%水準で有意なプラスの標準偏回帰係数を示している。両場面とも共通して有意な標準偏回帰係数を示しているのは他者からの嫌がらせと性役割に基づく成功不安であり、男子が女性的課題において達成行動を取ることを妨げている主な理由は、「そのような達成場面で成功したら、男らしくないと思われてしまい、そして周りから冷やかされる」といった不安であるということがわかる。また、ここでも、競争相手が男子であるか、それとも女子であるかといった条件の違いはそれほど結果に影響していないように思われる。

次に、女子被験者の結果(Table 6)を見てみる。全ての場面において決定係数は有意であり、モデルは有効であった。第 場面においては他者からの嫌がらせ、自信の欠如、成功後の負担の増加が 1%水準で、性役割に基づく成功不安、重要性の認知の欠如が 5%水準で有意なプラスの標準偏回帰係数をそれぞれ示している。第 場面においては、他者からの嫌がらせ、自信の欠如、性役割に基づく成功不安、成功後の負担の増加が 1%水準で、重要性の認知の欠如が 5%水準で有意なプラスの標準偏回帰係数をそれぞれ示している。有意水準には一部、差異が見られるものの両場面は基本的に同じパターンを示している。このことから、女子が男性的課題で達成行動を行う際、阻害要因となるのは達成後に行わなければならない仕事への不安の他、性役割を逸脱してしまうことにより、女らしくないと評価されたり、嫌がらせをされたりするという不安であることがわかる。

第 場面においては動機づけの欠如が 1%水準で、怠惰さが 5%水準で有意なプラスの標準偏回帰係数を示している。また、第 場面においては、動機づけの欠如、重要性の認知の欠如が 5%水準で有意なプラスの標準偏回帰係数を示している。女子が女性的課題で達成行動を取らない場合、その理由はどちらかということその本人の性格的なことにあると言える。

Table 5 - 6 を全体的に見わたしてみると、男女ともに自らの性役割と異なる課題に挑戦しようとするとき、他者からの嫌がらせや性役割に基づく不安を感じ、そのことによって達成行動が阻害されているという結果が示された。従来の研究においては、達成場面として男性に望ましい課題の取り上げられることが多く(宮本, 1979)、そのため成功回避動機が女性に特有なものとして考えられてきたが、実は状況によっては男性にも現れると言えるだろう。しかし、その影響の大きさは他の阻害要因に比べ特に顕著であるということではなく、達成場面ごとに様々な阻害要因が同時に働き、性役割に関することはそのうちの一部にしかすぎないと言っていることができる。課題の性質、競争相手の性質の他、無数の要因が関係してくる現実の生活においては、この傾向はさらに強まるのではないだろうか。また競争相手の性別は、達成行動を取るか取らないかにほとんど関係していない。それから、競争相手に対する気遣いや失敗によって受ける恥は有意な標準偏回帰係数をひとつも示しておらず、「他者に対する配慮」や「失敗を恥と考えること」が、少なくとも本論で取り上げた場面において阻害要因となることはないようである。あるいはこのことは、中学生の特徴であるのかもしれない。

引用文献

- Atkinson, J.W. 1958 Thematic apperceptive measurement of motives within the context of a theory of motivation. In J.W. Atkinson, (Ed.) 1958 Motives in fantasy, action, and society. New York: Van Nostrand. Pp. 596-616.
- 東村高良 1972 国家イメージの測定 Semantic Differential法を用いた国家イメージの測定 関西大学大学院人間科学, 1, 31-48.

- 樋口康彦 1995 組織の4要因が従業員の達成動機に与える影響について 大卒男子従業員の意識調査から
応用心理学研究, **20**, 11-22.
- 樋口康彦 1996a 達成動機と過去・現在・未来像の関係 関西大学大学院人間科学, **45**, 107-121.
- 樋口康彦 1996b スポーツ集団における組織要因とメンバーの達成動機との関連について 実験社会心理学
研究, **36**, 42-55.
- Hoffman, L.W. 1974 Fear of success in males and females: 1965 and 1971. *Journal of Clinical
Psychology*, **42**, 353-358.
- Horner, M.S. 1968 Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and
non-competitive situations. Unpublished doctoral dissertation.
- Horner, M.S. 1972 Toward an understanding of achievement-related conflicts in woman. *Journal of
Social Issues*, **28**, 157-175.
- Hyland, M.E. 1989 There is no motive to avoid success: The compromise explanation for success
avoiding behavior. *Journal of Personality*, **57**, 665-693.
- Isaacson, R.L. 1964 Relation between n-achievement, test anxiety, and curricular choice. *Journal
of Abnormal and Social Psychology*, **68**, 447-452.
- 峰田信雄 1969 S.D.法による精神薄弱児の意味構造の研究 臨床心理学研究, **8**, 129-136.
- 宮本美沙子 1979 達成動機の発達および形成 宮本美沙子(編著) 達成動機の心理学 金子書房 Pp.55-
84.
- Robbins, L & Robbins, E. 1973 Comment on: "Toward an understanding of achievement-related conflicts
in woman". *Journal of Social Issues*, **29**, 133-137.
- 柴田 満・辻岡美延 1984 確認的因子分析における因子的不変性の評価 関西大学社会学部紀要, **16**, 91-
132.
- Spence, J.T. 1974 The thematic apperception test and attitudes toward achievement in women: A new
method of measurement. *Journal of consulting and Clinical Psychology*, **42**, 427-437.

Abstract

The purpose of this study was to obtain the basic knowledge of elements that interrupt achievement behavior. To put it concretely, we tried to identify their dimensions, and to recognize the effect on achievement behavior in different situations. Junior high school students (males=144, females=90) were selected as subjects, and data were collected by means of questionnaires that used projective technique.

As the result of analysis, the following results were obtained:

1. Factor analysis identified nine factors related to elements that interrupt achievement behavior: (1) Concern for rival, (2) Feeling shame at failure, (3) Being played a dirty trick by others, (4) Laziness, (5) Lack of self-confidence, (6) Anxiety of success, based on gender role, (7) Lack of motivation, (8) Increase of responsibility after success, (9) Lack of recognition that the success is important.

2. Subjects were interrupted achievement behavior by "Being played a dirty trick by others" and "Anxiety of success, based on gender role", when they tried to challenge the task that was unsuitable for their gender role. But the effect of "Being played a dirty trick by others" and "Anxiety of success, based on gender role" wasn't necessarily remarkable compared to other

elements.

Key words: Achievement Behavior, Elements that Interrupt Achievement Behavior, Avoidance of Success